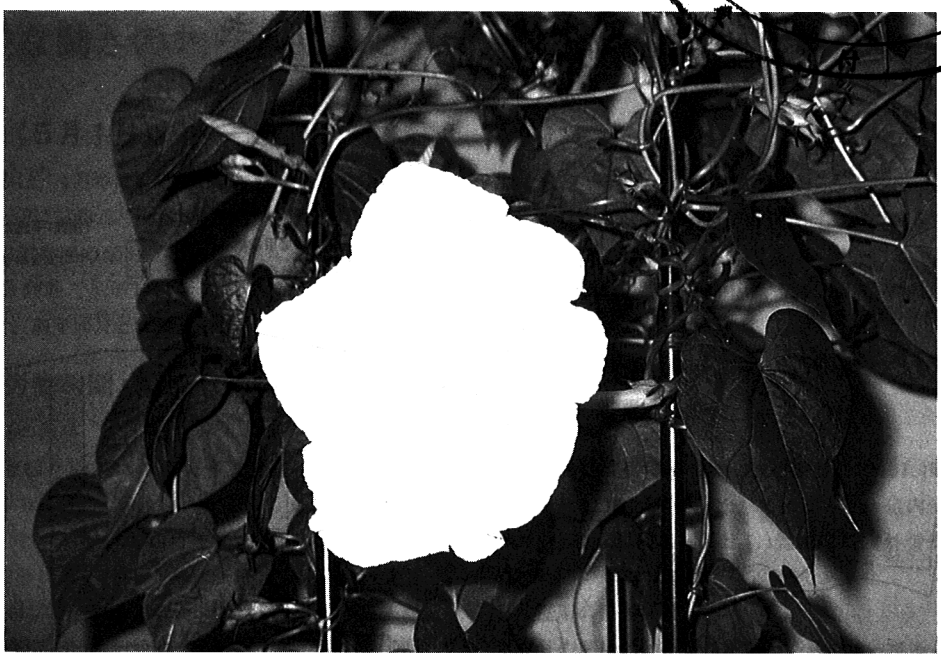
群馬県行政情報センター
平成 6.8.09 印



ヒルガオ科の夕顔

夕　　顔

暑かった夏の一日が終わり，夕方の涼しい風が吹き始めるころになると，深まりゆく夕闇に夕顔の白い花がひっそりと浮かびあがります。

夕方開いて，翌朝しぼむ習性からこの名称となりましたが，夕顔には，朝顔，昼顔と同じヒルガオ科の夕顔と，もう少し小型の花をつけるウリ科の夕顔とがあります。

ウリ科の夕顔は結実し，その果肉を細長く帯状に削って乾燥させたものが「干瓢（かんぴょう）」となり，鎌倉・室町時代以降食用とされてきました。現在では，精進料理や巻鮨に欠かせないものとなっており，年間約2,400 t 生産され，その９割を栃木県が占めています。

どちらの夕顔も一日花という短命ですが，清楚で野趣に富んだ涼しげな花です。

「暮れそめて草の葉なびく風のまに
　　垣ねすずしき夕顔の花」

藤　原　定　家